

禪宗安心の要諦

木村宗圓

一、前序

私達の一生は、神から生れて神に生れ入る此の二つの間の歷程を指すのである。こは「神に就いて」の著者の言である。私は生命の矛盾に泣いた。此の地上に、生命の喜びに接する事の餘りに日暮れて道の遠いのに悲しみ悶えた。私は天國を夢みた。神（眞理）の世界を憧憬れた。慈悲深い神のみ胸に抱かれて、安らかな眠りを欲し願ふた。私の心の神の世界への辿りし歩みは斯うである。今譬喩的に説明せば、京都を煩惱の焔燒え盛る阿鼻叫喚の聲かまびすしい火宅の現實世界と假定し、江戸を四時鳥歌ひ花咲く天國、神の都と假定する。私は京都を逃れ出てどんなに江戸の地を戀ひ慕ふた事でせう？ 其の天國なる江戸に達するには、東海道、中仙道、北陸道の諸道がある。私は基督教を覗いた。淨土教を問ふた。禪宗を弄んだ。信念の不及に依つてか、私は江戸に達し得ないはがゆさを思ひ悶ゐた。己に達せる祖師先哲の、天國から下界の火宅に求道の火に燒えて居る私達を眺めて、慈悲の手を垂れんさせられたのに拘はらず、徒づらに雲上の事のみを説かれるに失望させられた。私達が下界より天國を仰ぎ望んで、どんなにあせつた事でせう？、神の都のみに心を奪はれて脚下の照顧を怠る時、石に躓ついたり千仞の谷に落ちたりして、遂に喪身失命の悲しい運命に遭遇するのである。陥らずとも道中に先哲の足跡消失して、一本の道標も見當らず、丈なす雜草茫々とした曠野に、其の前途の黒闇々なのに魂魄抜け氣

力盡きて、祖師先哲の餘りの超然主義なのに泣かされた。私は怨みさへした。途方に暮れて涙の淵に流浪ふ小羊の悲しさを味つた。

然るに私は、其の黒闇々裏に、自己の内面に閃く小さな一つの火花を見出した。其の火花の光によつて、私の進む可き道の茫然と照し出されたのに喜悅し、脚下に細心の注意と努力を拂ひながら天上を望んで徐々に進んで行つた。其の結果遂に神の都なる江戸に達し得て佛の手を取り、祖師と共に相語る事の出来たやうな氣がしてならないのである。

私は知つた。今迄煩惱の火宅と思つて居た京都の地が、有るが儘江戸と同じく神の都である事を。京都に居ながら江戸に遊び得る事を。地上即天國、白隱の當處即蓮華國なる事を確信するやうになつた。道は遠きに非ず汝の心の中にありこのキリストの言葉も懐しく感ぜられた。

私達一生は、神から生れて神の都に生れ入る間である事を知つた。同時に私達の生命は永遠に神と共にあるべき事をも知つた。私は此の法悅の中に、神のみ胸に抱かれて、禪に對して迎ひし心の跡を墨付けて見たいと思ふのである。

二、 禪より見たる本體

宇宙には宇宙の本體(實體)なるものがなければならぬ。而もそれは唯一絶対の眞實在でなければならぬ。元來宇宙の實體は科學的には眞理と稱せられるけれど、宗教的には如何に稱せられて居るかを見るに、華嚴經には一心、圓覺經には圓覺、涅槃經には佛性、唯識論には眞如、起心論には衆生心等と説かれてある。然るに我禪家には、所依の經典なるものなし。従つて固定せられた名稱もこれ亦ないのである。されど往古來今祖師先聖の口唱せられた所を見るに、上述の各經の名稱を用ゆるの外、禪獨特には本來の面目、妙心、靈智不昧の一心、佛心、言妄慮絶不可言の法體、六祖の自性本來清淨

又は無一物の當體、盤山の向上一路千聖不傳、或は大殊の無住心等で、不思議不思議の妙法で、「細入無間大絶二方所」(寶鏡三昧)ものである。一心の空王を觀するに玄妙にして測り難し、無形無相にして大神力有り、能く千災を滅し萬徳を成就す、體性空なり。雖も能く法則を施す、大法の將たり。」(善慧大士)

此くの如く其の名稱數ふ可くも非ずして、右の如く多面多様に稱破せられてるを以て、宇宙の本體の何物であるかは大概想像のつく事であると思ふ。

本體は唯一絶對の實在であつて(靜的存在者ではない)能動的活力を有し、活潑々地に一切萬象を創造する力(太古猶太教に於ける創造主神は其の意を異にす)を有して居るものである。否活力自體である。而も本體は本來無相にして、手に觸れ眼に見る能はざるも、至らざる所にてはなく、所謂一即一切、一切即一である。唯一絶對なる故一切の言語文字を離れて、吾人の智解の遠く及ぶ所のものでない。心から心にのみ流れる所のものである。而して論理の世界外に兀然たるものである。何となれば論理は、吾人理性の終局であり、言語文字は相對的のものであるから。

宗教的本體は理性を超越し、論理をこそ可能ならしむるも、理性のよく對象物とはならない處のものである。而して絶對相對の二面を離れた眞の唯一絶對のものであるからである。

我從_二得道_一來、不_レ說_二一字_一汝亦不_レ聞(大般若經。)文殊師利歎曰善哉々々乃至無_レ有_二文字語言_一、是眞入_二不二法門_一。(維摩經不二法門品)

故に宗教的本體は言語文字の差別相から、或は論理の世界から離れたものである事は容易に首肯し得る事と思ふ。されば言妄慮絶不可言の法體も、不思議不思議の妙法も、或は不可思議不可稱量無邊の功德(金剛經)等云はれる所以で

ある。一休禪師は、形なき故に即ちこれを佛ミは云ふなり。佛心ミも、心佛ミも、法心ミも、佛祖ミも、神ミも、もろもろの名は皆はこなたより名づくるなりミ這般の消息を詮表して居られる。

三、 本體と吾人との關係

關係ミは二者、或はそれ以上のもの、相互の交渉を意味するものであつて、關係の裏には己に相對的なる事が豫想されて居るものである。

本體ミ吾人換言せば實在ミ現象、更に佛(神)ミ衆生ミの交渉關係は如何ミ見るに「即」の一字を以て説明し得と思ふ。本體と吾人ミ云へば、二者その名を異にすれミ實は然らずして、兩者は密接なる關係を有し不即不離である。同一體の二面である。即心即佛、即佛即心である。されば涅槃經には一切衆生悉有佛性、如來常住無有變易。華嚴經には三界唯一心外無別法、心佛及衆生、是三無差別ミある。佛も衆生も共に唯一心(絕對的一心)の別名にして、其の間無差別なる事を證せられたのである。六祖大師は人雖有南北佛性本無南北猶獠身與和尚不同佛性有何差別ミ五祖忍和尚に自己の心狀を吐露して居られるのである。臨濟禪師は赤肉團上有無位真人ミ云々とか、或は汝一念心上清淨光是汝屋裏法身佛とも獅子吼せられて居る。實朝の言葉借りて云へば、「神ミいひ佛ミいふも世の中の、人の心の外のものかは」である。更に西哲の口吻を模すれば、ポーロは「汝の身はその内にある神より受けたる聖靈の宮にして、汝等は己のものに非ざる事を知らぬか」ミ神人別體説に沈む者に痛棒を與へて居る。フエヘルは「吾等の生活も感情も思想も皆神のものなり。吾等は神の中に於て生き、働き、又存するなり」ミ頗る他力的見方なれど、神人の關係を遺憾なく顯表し居るものにして、他山の石として見る事が出来るのである。

以上經典及先哲の言を引證し來たれども、要は本體即吾人、實在即現象、佛(神)即衆生なる事の宗教の究極である事を知解せば可である。吾人の真理への旅路は此の究極の境を體得するに外ならないのである。

實在の外に現象なく、現象の外に實在なく、佛の外に衆生なく衆生の外に佛なし。二者不即不離の關係であつて、「即」の字を離れて理解する事は出來ないのである。白隱禪師の「衆生本來佛なり水ミ氷の如くにて、水を離れて氷なく衆生の外に佛なし……當所即ち蓮華國此の身即ち佛なり」に如實に體證し得てこそ、眞の宗教的生命に生き得るのである。

くもりなき一つの月を持ちながら

浮世のやみにまがひぬるかな (一休禪師)

佛法を神や佛にわかちなば

まことの道にいかゝ入るべき (同)

We know God easily if we do not constrain ourselves to define Him: — Tawhert.

四、禪宗安心の要諦

禪宗安心とは禪宗に於ける修業の過程によつて得られる所の心的状態を意味するものである。廣義には宗教的安心なるも、今禪を立脚として論ずる以上禪の規範に依る事や明白な事實である。而して安心は果徳であつて悟境なれば、それ自身非説明的の境界であつて、言語文字のよく寫描し得る所ではない。されば禪の安心を論ずるは、禪的修業の過程規範を論ずるに外ならないのである。

古來禪宗に於ける唯一の玉手箱は、坐禪の一事實である。されば坐禪の内外兩面的意義を説明すれば足ると思ふ。今順

序として先づ内面的瞥見を試みんごす。

我禪は教外別傳不立文字直指人心見性成佛の鮮旗幟を樹立して、他の宗風に一異彩を放つて居るのである。故に要は人心を直指して、見性成佛する事である。一言にして云へば見性である。従つて見性が禪の安心でなければならぬ。見性とは自己の本性を正視する事である。佛の性中に自己を見出す事である。佛ご自己との一相なる事を如實に體感する事である。分裂意識の絶對的統一である。坐禪觀念を凝らすは此の見性底に達せんごする、或は宇宙的生命に交らんとする一種の過程に外ならないのである。實に見性底は釋尊の菩提樹下に於ける正覺解脱の妙境なれば、其の眞實を顯表し得る言語文字は有り得ないのである。これ教外別傳別傳不立文字と出張する所以である。されご文字を離れて解脱を説くのではない。

……然不立文字失意者多、往々謂屏去文字以默坐爲禪。斯實吾門之啞羊爾。且萬法紛然、何只文字不立者哉
……。(碧巖不二鈔)

佛の悟境は非思量、非説明的不可思議のものなれば、文字以上に超然として冷暖自知するの外理解の道はないのである。故に文字を指月の指ご見て、それに拘泥せん事を誡めたに過ぎないのである。

見性底即ち佛の境地ごは、人心を直視して個々圓具の佛心を見極めた境を指すのである。換言せば自己の小なる心ご宇宙の大なる心性ご冥合し、小我の大我に没入して稱す可く、名づくべきなきの天上天下唯我獨尊の自覺境である。六祖の本來無一物の當體にして、孤明歷々赤々洒々ごして三世十方に通貫し居るもので、強いて名づけて清淨心とか至善とか云ふのである。金剛經には無住心とも説かれてある。要するに寂然不動如々の一大空境であつて、少くごも靈的衝動の起る

者は、何人にも此の境地に到達せん事を要求して止まないものである。斯かる要求をこそ宗教的要求と、私は稱したいのである。「眞の宗教的覺悟は、思惟に基ける抽象的智識でもない。知識や意志の根底に横はる深遠なる統一を自得するのである。即ち一種の知的直觀である。深き生命の捕捉である。故に如何なる論理の刃も之に向ふ能はざるものである。」(善の研究)

今禪の安心とは、言葉を變へて云へば無住心に住する事であるとも云ひ得る。何となれば見性底は、無心の境で無住心に住する事と同じであるからである。無住心に住する事は、ノヴァリスクの至る所に我が家を求めたい衝動である。元來禪宗に於ては、前述の如く直指人心を重用視して、不立文字にて論理的説明を輕視せしは、實踐的方面を重ぜし結果、機に觸れ折に臨んで殺活自在の妙藥を投與せんことを爲である。

次に外面的意義を考察せん。外面的意義とは、如何にして見性すべきか、如何にして無住心に住すべきかの過程手段の説明に外ならないのである。其の過程に於ては、前述の坐禪觀念に依つて、心を清淨にする一事である。古來禪門に於ては、見性への關門を無字となす。無字の關門を透徹せざれば禪の安心は得られないのである。

祖師關只一箇無字、乃宗門一關也。(無門關)

故に外面的意義は、此の無字の公案道の上に於て、一切分別取捨の妄相を斷滅し、無心々々大無心、徹底無心大無心こそ定道を突進して、本來圓具の清淨なる自己を正視するにあるのである。唯心の彌陀、己心の淨土の體現にあるのである。否定道は佛教の通唱する所なれど、より肯定への段階の意味である。眞の肯定は、否定を徑由する事なくしては現はれて來ない。否定とは大死の境である。大死は大活への唯一の關門である。強く生きんことを、強く死の關門を通らなけ

ればならない。大死は自己を凝視し、自己に透徹し、自己を超越する事である。佛海に自己を投殺して、其處より最も意義ある眞實なる自己の、佛の姿に於て顯出せんことを潛勢の妙力を得る事である。故に普通に云ふ肯定に對する否定は、大いに其の趣を異にするものである。永遠の否定は、永遠の肯定に入る門なりとはカーライルの言である。小さな自己を否定し盡して、アートマンに没入し融合一致する時、同時に大なる自己、自律的大我の自ら顯現する事の必然的な事を知るのである。私の腦裏を常に去らないものは、ポーロの言へる次の一句である。

We look not at the things which are seen, but at the things are not seen.

自己に云ふ小さき身をば捨て、見よ

三千世界はわが身なりけり。

願聞先聖教者各令淨心、聞了各自除疑如先聖無別。自性本清淨但用此心直了成佛、論見性不論禪定解脫……………(六祖壇經行由品)

論見性云々は、禪定解脫は見性する事に依つて、自ら附隨して現はれる果徳であるからである。大燈國師は、只須十二時中向無理會處究來究去、光陰如箭謹莫雜用心、三垂誠せられて居る。アルベルトは、神に登ることは自己に入るの謂である。何となれば自己に入る者は自己に徹し、自己を超え、直ちに神に登るからであるとい説く。エツクハルトは、汝が神に心を開くことは、神が汝に入ることは同時であるとい云ふて居る。神に心を開くことは、自我を没して無心の境に入る状態で、神が同時に入ることは、自己が直ちに神となり佛となる事を意味するのであつて、禪家に於ける見性を以つて成佛などすの鬚髯たるものである。聖フーゴーは、神に登る道は自己に歸る道であるとい唱へて居る。直に自己に死ぬ者は神に生

きる者である。眞に神に生き得る者は、眞實なる自己に生き得るものである。坐禪觀念の否定道を迎るも、自己に死して佛に生れる事に外ならないのである。大活は大死の下にのみその妙用を發し得るものである。死ぬ事と生きる事は、同時でも同意識でなければならぬ。何となれば吾人は自性本來清淨佛であるからである。此處に思ひ起すはサンタヤーナの言葉である。

There is an absolute ideal in which all other ideal lose themselves.

心淨きに從つて其の國土淨し………(維摩經)

心を清ふして志を守らば至道を會すべし(四十二章經)

心清ければ神を見る(マタイ傳五ノ八)

何れの宗教も神を見、佛を見るには、心を清淨になす即ち臨濟の人境兩具奪境を最も肝要事とすのである。我國の神教に於ても、祇い給へ清め給へ唱ふるではないか。眞に神を見佛を見るときは、自己が神と一致し佛と融合して、神佛が自己であり、自己が神佛である事を意味するのである。自己の絶對化である。自己の統一である。釋尊成道の時、奇哉一切衆生具三有如來智慧德相、三喝破せられたのは、這般の消息を物語るものではないか。

斯くの如く見性成佛は、否定道を辿りつゝ、心を清めて一念不生に至つた時、自己木具の清淨心忽ち現前し、佛凡の隔なき混沌たる末分の一者所謂老子の恍惚の境に入つて、佛と面し、神と握手し始めて心佛及衆生是三無差別の平等の哲理も了解せられ、涅槃の妙海に般若の舟に掉さす事も可能となるのである。

以上坐禪の意義を乍不及内外兩面より簡單に考察を試みたと思ふけれども、單に斯かる寂靜涅槃の海に入つて、佛と語

り神ミ握手する事のみを以つて最終の目的とせば、それは小乗的であつて大乘教徒の満足し能はざる所である。水は池に溜止する事のみを知つて、流れ出づる事を知らざれば、水ミしての活用は現はれないのである。元來水は能動的なもので池に溢れ縁に従つて、流れ出づる所に始めて田を潤ふし舟を走らせ車を廻すのである。其處に水ミしての本性は遺憾なく發揮せられ、水の水たる價値が生ずるのである。それと同様に見性して唯單に涅槃の海に止まるのみでは、自利的聲聞縁覺の二乗であつて、何等の能動的活作用をなし得ず、却つて生命をして萎縮せしめるものである。涅槃の海に於て佛と合し神ミ交り、大宇宙の大心性ミと冥合して、恰も水の方圓の器に隨つて能く其の形を成して而も其の本性を失はざるが如く、無碍自在に動く所に自利々他の菩薩の大行が完成せられるのである。自己の眼前に展開せられて居る一切を禪化する事が出来るのである。これ大乘ミ稱せられる所以でなければならぬ。老子の所謂無爲而無不爲の境である。されば金剛經には、應ミ無所住而生其心ミである。無住心に住して爲す一作一行、即ち吾人日常の行住坐臥、運水搬柴、喫茶喫飯は、その儘佛作佛行でなければならぬ。臨濟禪師は、爲ミ主隨處立所皆眞なりと喝破して居られる。大活の妙用は、轉處實に能く幽なりミ讚嘆するの外はないのである。大活の爲には喪身失命を敢へて辭せざる底の大勇猛心を起して、否定道の險難を突破し、見性の悟境に及び出で、一切の萬象皆佛性の顯現なれば、路上の土塊、道端の無名草ミ雖も捨つべきもなく、現象その儘如來の妙なるみ姿である事を如實に體得するミ同時に、自己も亦如來の一化現、即ち本來清淨佛であるこの大信念を感得して、自由と獨立の妙境に活作自在に生き得る處に禪の安心はあるのである。

Life is measured by the depth not the lenghs of years.....Father Ryan.

五、後 序

禪宗安心の要諦は、不完全ながら前節迄に於てものした事と思ふ。されば結論として別に論ずべき事なし。故に今は唯先賢の轍を踏んで、後序として一言せんとするのである。

元來禪に關する奥義は、不立文字にて能く筆紙の寫描し得る所に非ざる事は、己に論じたのである。されど第二第三義門に下つて、猶字象に現はす事の無價値でない事は是亦明かな事實だと思ふ。淺薄なる思想も、劣悪なる頭腦をも顧みず眞理の都を指して行く巡禮者が日頃の思索の微々たる、有るか無きかの跡を染めた迄に過ぎないのである。誰の言葉であつたか、今時の學者一切開法修業の志薄きは、實に末世の澆運甚だ淺ましき事ぞ。法を求めぬ爲には、喪身失命を敢て辭せざる底の人の少くなりしを遺憾となすこあるを記憶に止めて居る。實に後世の求道者に對する慈母の箴言ではないか。

生死事大光陰惜しむべし、無常迅速時人を待たず、眞理の殿堂の扉を開かんとする者、龍宮の法冠を得んとする者は、光陰空しく過す事なく、志の未だ達せずんば死すとも辭せざる底の大勇猛心、大精進心を起して、大象の河を渡るが如く一步一步確かな歩みを以つて巡禮の旅路を續けんを念願して止まないものである。